

美術科学習指導案

3.指導学級 第2学年

4.単元名 “痕跡アート”の鑑賞 ～表現の多様性と作品の解釈を広げよう～
(B鑑賞(1)ア(ア))

5.生徒観

これまで生徒は、鑑賞の授業において美術作品をタイトルや解説文を手がかりに理解するだけではなく、対話型の鑑賞を通じて作品の見方や考え方を深めている。一つの作品をよく見て、自分の考えたことを言語化し、根拠を示して発言することで、1つの作品に対する解釈の多様性や可能性について考えた。

また、身近な「美」を見つけるという課題において、自らの感性を働かせて「美」を探し、「なぜ美しいと感じたのか」に関する分析を行うことで、様々な視点から対象を見つめ、「美」に対する自分なりの根拠を主体的に見出した。

そして、「“アート”とは何か」という授業において、作品のコンテンツではなく、アーティストの思考や制作のプロセスから学びを得ることで、自らの「固定概念」や「常識」について考え直すとともに、「美」や「作品」、「アート」についてゼロベースで思考した。

以上の学びから生徒は、作品鑑賞において、「わからない」から「考えない」のではなく、たとえ理解する手がかりが少ないような作品であっても、「わからない」からこそ「なぜ」と疑問を持ち、そこから深く作品を理解しようとすることができる。

6.題材観

美術館などで作品を鑑賞するとき、タイトルやキャプションに書かれている言葉を頼りに作品を解釈していることがある。その場合、作品を鑑賞する時間よりもキャプションを読む時間の方が長くなったり、書かれている内容で作品を理解した気になったりする。それらは、作品解釈の幅を狭め、作品から得られる、もしくは気づける情報の多くを見落とす原因となる。さらには、誰かと対話的に鑑賞しない場合、自分だけでは気づくことのできない多様な解釈にも出会えない。

そこで、同時代のアーティストの作品を取り上げ、作品を制作行為の痕跡として見ることによって、見えている情報のみに捉われず、それらを手がかりとして制作方法や作者の思考の過程を想像し、作品に対する解釈を広げていく。その後、アーティストの制作風景を画像や動画で見ることで、作者や作品に対する理解をさらに深めさせたい。

本時では、目の前にある作品を制作や思考の痕跡として捉えるため、主体は作品（もの）ではなく行為（こと）にある。そのため、作品の完成度や技能的な部分だけを評価するのではなく、作品のコンセプトを含めた制作過程全体を見取することに重きを置く。また、自他の作品を鑑賞する場合は、痕跡（作品）から自分なりに作者の意図や工夫を読み取り、対話を通して多様な解釈に触れられるよう鑑賞方法を工夫する。

7.指導観

自他の作品を対話的に鑑賞し、作品の解釈を深めるとともに、表現の多様性や可能性を感じることができるよう指導する。

鑑賞の際は、作品を自分の机の上に設置し、〈いつ〉〈どこで〉〈なぜ〉〈どのように〉制作したのか「わからない」状態で15分程度鑑賞する。その中で生徒が気になった作品を一つずつ順番に取り上げ、書画カメラでスクリーンに投影し、全体で5～10分程度対話的に鑑賞する。その後、作者が作品解説をするという流れを時間内で繰り返す。

対話を用いた鑑賞によって言語活動の充実をはかり、作品に残された行為の痕跡を手がかりとして、自分なりの見方や考え方を見つけ出せるようファシリテートする。また、他者の見方や考え方を否定しないとともに、作者の意図や制作方法の単なる推理にならないよう注意する。

作者が作品の解説をする際には、ワークシートを活用し、「いつ」「どこで」「どのように」制作したのか、また、作品の「コンセプト」について発表する。

作者の解説を聞いてから鑑賞シートにまとめを書くことで、この授業で考えたことを整理させる。その中で、作品に対する印象の変化などに気づけるよう助言を行う。

◆鑑賞までの授業について

“痕跡アート”の制作は、長期休暇となる夏休みや冬休み等の課題として取り組ませた。まず、制作のきっかけとなる4つのテーマ〈スポーツ〉〈音楽〉〈食事〉〈ハプニング〉を提示し、そこから自分の趣味や特技、普段の生活などの行為（行動）を基にパフォーマンスを考え、配布した8つ切りサイズの画用紙にパフォーマンスの痕跡を残してくるよう指示した。なお、偶発的・概念的に制作される場合やどのテーマにも当てはまらないような場合も考えられるため、〈ハプニング〉というテーマを入れた。

第1次から第3次までの授業においては、現代アートやコンセプチュアルアートなどの作品を鑑賞し、美術作品における“わからない”について考え、表現の多様性に触れる機会をつくるとともに、作品理解をさらに深めるため、パフォーマンスアート作品を通じて制作プロセス（作者の思考や制作方法）へ目を向け鑑賞することの意味を考えさせた。

・作品に対して「わからない」と疑問を持つことはいけないことだと思っていたけど、

それが一番大切だと知りました。作品を見たときに「この作品をなぜ描いたのだろう」と考えて、自分でわかろうとすると、なんだか楽しくなってきました。もし美術館に行ったら、少し立ち止まって考えたいです。

(振り返りより一部抜粋)

・「ボクシングペインティング (篠原有司男の作品)」を見て、「何を描いたのか」を考えると、木とか森とか黒い花を思い浮かべてそれで終わってしまうけれど、「どうやって描いたのか」という制作の痕跡として見ると、墨をつけてパンチしたということがわかって、そこからまた「どうしてかな？」という新たな疑問が浮かんでくる。

(振り返りより一部抜粋)

その後の授業では、「画用紙以外を使用してもいいですか？」や「画用紙に痕跡が残らなくてもいいですか？」、中には「自分がつくらなくてもいいですか？」など、表現の可能性を広げるような質問が多く出てきた。

生徒にとって「材料＝絵の具」「道具＝筆」「方法＝筆で描く」など、「～でなければならぬ」や「～しなければならない」といった美術に対する固定化された認識を、例えば、自分の得意なスポーツ＜サッカー＞をテーマにそれぞれを転換することで、「絵の具→砂」「筆→サッカーボール」「筆で描く→ボールを蹴る」のように表現の可能性を自ら広げることができる。そのため、事前に新たな知識や技能を取得する必要はなく、また、スポーツ競技のように鍛錬した技能の試し合いにもならない。あくまで、配布した画用紙に何かしらの思考や行為が痕跡として残されていることを条件に、使用する材料や道具、技能などはパフォーマンスに応じて自分なりに考え判断していた。

作品の制作プロセス（作者の思考や制作方法）に目を向けることによって、“痕跡アート”を制作する上での意識や認識の変化をもたらすとともに新たな土台ができたと考えられる。

8. 単元目標

- ・ 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、作品に対する痕跡としての視点を持ち、その形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを理解している

【知識・技能】

- ・ 行為と作品の関係性を考えながら課題に取り組み、表現の幅を広げている。造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている【思考・判断・表現】
- ・ 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の幅広い学習活動に

取り組もうとしている【主体的に学習に取り組む態度】

9.単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、作品に対する痕跡としての視点を持ち、形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを理解することができる。	行為と作品の関係性を考えながら課題に取り組み、表現の幅を広げることができる。 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めることができる。	美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の幅広い学習活動に取り組もうとすることができる。

10.単元の指導計画（全3時間）

- 第1時 制作過程を見てみよう！ 同時代のアーティストの作品を痕跡として見る
第2時 “痕跡アート”に挑戦！ 行為を痕跡として残す方法を考える
家庭学習 “痕跡アート”の制作 描くだけではない表現の広がりを見つける
第3時 “痕跡アート”の鑑賞 対話を用いた鑑賞で見方・考え方を深める【本時】

11.本時の指導内容 「“痕跡アート”の鑑賞」 対話を用いた鑑賞で見方・考え方を深める

12.本時の目標

- ・対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを理解している【知識・技能】
- ・造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている【思考・判断・表現】
- ・美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の幅広い学習活動に取り組もうとしている【主体的に学習に取り組む態度】

13.本時の評価基準

	A「十分満足できる」	B「おおむね満足できる」	C「努力を要する」
知識・技能	対象や事象を捉える造形的な視点について、既知の学習を生かして自分なりの見方や考え方をさらに深めることができる。形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを理解した上で、新たな価値観を見出すことができる。	対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを理解することができる。	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の考えを持たずに受動的に鑑賞している。形や色彩などの性質から感情にもたらす効果などを自他の作品からも考えようとしていない。
思考・判断・表現	作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて理解するとともに、自分の考えや表現に繋げようとしている。積極的に主題を生み出しながら、美意識を高め、見方や感じ方を深めることができる。	自他の作品の造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えることができる。美意識を高め、見方や感じ方を深めることができる。	自他の作品の造形的なよさや美しさを感じ取ろうとせず、自分の見方や考え方を広げようとしていない。作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えようとせず、表現にも活かすことができない。
主体的に学習に取り組む態度	美術の創造活動の多様性や喜びを味わうことができる。主体的に作品や美術文化などの鑑賞の幅広い学習活動に取り組むとともに、楽しく積極的に表現に取り組もうとしている。	美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の幅広い学習活動に取り組もうとしている。	自ら課題を持って表現及び鑑賞の学習に取り組むことができない。本時の活動の様子について振り返ることができるよう促す。

14.本時の展開

過程	学習項目	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	・準備 ・本時の活動（鑑賞）についての説明	・ワークシートを準備し、作品を提出する	・自他の作品を対話的に鑑賞し、作品の見方や考え方を深めるとともに、表現の広がりを感じることができるよう促す。
展開Ⅰ (35分)	・作品鑑賞 ・鑑賞シート記入	・書画カメラで映し出された作品を対話的に鑑賞する ・自ら気づいたこと考えたことを発言する中で、他者の解釈から見方や考え方を深める ・作者は作品の解説をするワークシートを活用し、「いつ」「どこで」「どのように」制作したかと「コンセプト」を発表する。 ・鑑賞シートに気づいたことや考えたことを書く	・鑑賞する作品は、番号カードを使いランダムに選ぶ。 ・行為の痕跡として作品を見ることができるように、作者名や制作方法、制作意図などを伏せた状態で鑑賞させる。 ・対話を用いた鑑賞によって、痕跡として残された行為の手がかりを読むとともに、色や形からも、言語活動の充実をはかり、自分なりの見方や考え方をを見つけ出せるようファシリテートする。 ・自分の考えたことを大切にすることで作者の意図や制作の推理ゲームに偏らないよう注意する。
まとめ (10分)	・本時のまとめと次回について ・振り返りシートの記入	・本時の鑑賞を通して自ら考えたことや感じたことを振り返る。 ・他生徒の表現や工夫について考える。	・生徒が次回の見通しが立つように本時の活動について指導者が振り返る。時間に余裕があれば、生徒からの振り返り発言を促す。

15.本時の準備物

(1) 教師準備物

鑑賞シート、書画カメラ、番号カード、

(2) 生徒準備物

ワークシート、作品、筆記用具

16.授業の様子・作品

“痕跡アート”の作品自体はあくまでも二次的な「痕跡」として捉え、主題は作者の思考や制作方法であり、その見えない制作プロセスに思いを馳せたり、疑問を抱いたりする中で、表現の多様性や解釈に出会える機会となった。

提出された作品は、自分の得意や強みを生かした作品だけでなく、自分の興味のある物事に対する実験的作品、ストレス発散のような衝動的な作品、成り行きや自然に任せたような偶発的作品、家族を巻き込んだ生活感の滲み出る作品など多種多様であった。

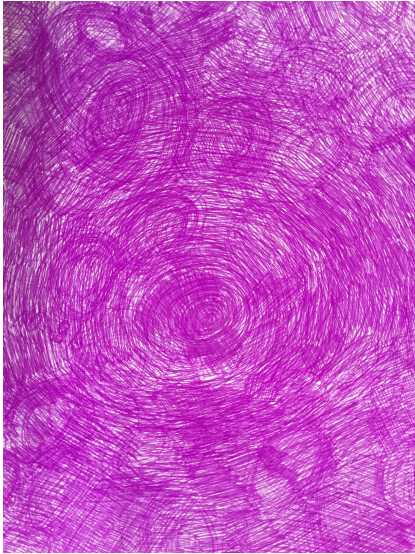
作品①



【作者の言葉】

この作品に意図はありません。これは完全なる“ハプニング”です。これができたのは2月2日、そう、節分の日です。何を提出するのか前日まで決まっていなかった私は、リビングに意味もなく紙を置いていました。するとどっこい、節分の恵方巻のために用意していた醤油が、紙めがけてこぼれていったのです。犯人はお母さんです。課題の紙であると知った母親が、必死で醤油を拭いたこすり跡から、母親の焦り具合が実にうかがえてしまいそうです。

作品②

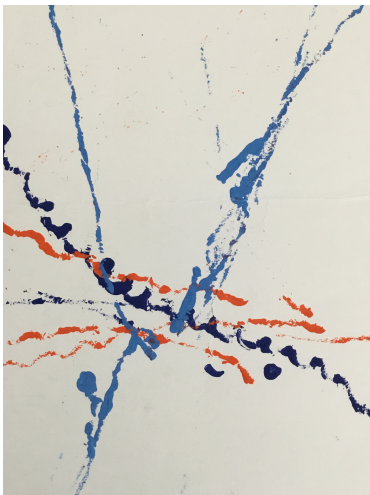


【作者の言葉】

新品のボールペンでインクがなくなるまで書き続けた。

2021 年になって初めてボールペンを使い切った女になりたいと思った。また、親に怒られて機嫌が悪かったので、ストレス発散のためにもやった。

作品③



【作者の言葉】

コマの下に絵具をつけて、そのコマを画用紙の上で回しました。

家でどんなことをしようかと考えていると、カレンダーに描かれているコマが目止まって、「コマは回るときにどんな線を描くのだろう」と疑問に思ったので、やってみました。

どっち向きにどんな形を描いて回るのか、その時によって違うのが面白かったです。

作品④



(父)

【作者の言葉】

家族4人のベッドの上に紙を敷いて、一晩中その上で寝る。

11時くらいに、私がこっそり敷きにいて、朝に回収しました。

思いっきり家族を巻き込みました。

水 色：父 11：00～5：30（6時間30分）

オレンジ：私 12：00～5：00（5時間）

ピンク：母 11：00～5：30（6時間30分）

黄 色：妹 10：00～6：00（8時間）

・美術の「美しさ」とは、もの自体にあるのではなく、描いている時間やそこに生まれる感情や描いた理由が「美しさ」なのかなと考えました。これらは形や色から見ようとしてみえないものなのかなとも考えました。

・自分が思ったことを素直に表現しているからこそ、共感も批判もあっておもしろいと思った。表現が自由なのであれば、鑑賞も自由なのだと感じた。

・今日は新しい気づきがたくさんあった。「えっ、すごい失敗した」とか「何かうまくいかんわ」ということも、アートとして見てみれば、「こういうところからこういうのができるのか」とか「これってこんな性質があるのだな」ということもわかってきて、そうした新しい見方に出会えるアートは最強だと思った。

・一人ひとりの作品をみんな見たい！！こんな興味深い作品鑑賞は初めてです。身の回りにあるものを、どうやって、誰が、どんな想いでつくったのか考えることが、こんな

に身近な存在でありながら面白いことだったと気づいたからです。これを機に、他の作品も興味を持って見てみたいです。

・一見、単純そうに見えるが実はとても奥が深いものや、深く考えてしまうが実はあまり意味はなかったものなど、見る人から見て、何を感じるかということは、だいぶ自由なのだと感じた。

・過程を知ると、その色や形や動きの意味がわかって、一種のストーリーを感じました。

(振り返りより一部抜粋)

<何を>ではなく<誰が><いつ><どこで><なぜ><どのように>を前提に鑑賞することで、手がかりの少ない作品からでも、積極的に多くの情報を読み取ろうとしたり、イメージを膨らませようとしたりする姿を見ることができた。

本題材を振り返ると、生徒自身にとって“当たり前”だと思っていた知識や技能、考え方や習慣などが、作品を介して表現され、自分らしさや魅力を再認識できる機会となっていた。また、鑑賞者は作者の意図や行為を作品に重ねて鑑賞することで、作品の目に見える情報(絵画的な二次元世界)だけにとらわれず、作品の新たな見方や考え方、意味や価値を見出せたのではないかと考える。

課題としては、自分の持つ「美術」に対する価値基準や固定観念に当てはめて作品を理解しようとする、作者の本当に伝えたいメッセージや想いを見逃すおそれが生じたり、「～しなければならない」といった固定化された認識によって、生徒の表現の自由や可能性、創造性などを阻害したりしてしまう可能性もある。また、<何を描いたのか>に偏った見方は、描く対象の再現性や描写技能ばかりを求める(生徒にとってはそれを求められているのだと感じる)授業にもなりかねない。

今後は、対話的な作品鑑賞の授業を基に、表現の多様性や作品の解釈を広げ、生徒の「もっと知りたい!」、「やってみたい!」といった必要感を高められる授業づくりを目指していきたい。